

韓国飛鳳里貝塚で出土した丸木舟の様相

李 相 均

要旨 本稿では飛鳳里貝塚で出土した丸木舟と櫂の出土状況を把握し、縄文時代の丸木舟と比較して韓半島丸木舟の研究を予察した。飛鳳里貝塚で出土した丸木舟は2隻、櫂は1点である。飛鳳里貝塚の1号舟は新石器時代の早期前半のもので、縄文時代の丸木舟より早い。飛鳳里貝塚の丸木舟は鏝節形である可能性が高く、縄文時代の丸木舟形態分類の2A類型に類似する。飛鳳里貝塚の丸木舟は原木を削り貫いてつくる単材方式である。加工においては丸木舟のところどころに焦痕と石斧による加工痕が残る。飛鳳里貝塚の丸木舟の材料はマツである。

縄文時代の丸木舟は縄文早期末から製作しはじめ、後期にいたっては集中的につくられる。平面形態は2A類型に分類される鏝節形がもっとも多い。時期的にも前期から晩期まで全時期にかけて発見される。縄文時代の丸木舟は原木を縦割りにして削り貫く単純な構造の単材方式であり、後期・晩期には丸木舟の舷側に板材をつける複材方式が用いられることもある。丸木舟には船底部に幅の狭い横帯が存在するものがある。縄文時代の丸木舟の材料はスギとカヤが主である。

1 はじめに

飛鳳里貝塚は韓国慶尚南道昌寧郡釜谷面飛鳳里44番地一帯に位置しており、月鳳山から南東へ延びた谷間と洛東江と合流する清道川が作り出した湿地に向かって突出する地点にある。韓半島で初めて発見された内陸の貝塚遺跡であり、低湿地遺跡でもある。発掘調査では貯蔵穴18基、焼土遺構7基、野外炉跡6基、小形竪穴2基、住居址2基などの遺構が見つかった。また、低湿地では韓半島最古、最初の資料である縄で編んだ籠、木器、糞石、動物文様の土器、丸木舟、櫂、そして南海岸新石器文化の特徴を見せる土器片を含んだ多量の遺物が出土された。湿地化された環境でドングリやマンシュウグルミの実のような植物、イヌやイノシシのような動物遺体も発見された。

特に、その中でも関心を引いたのは韓半島で最初に出土した最古の丸木舟である。2005年の第1次調査で2隻が発見され、内湾はもちろん沿岸を航海した証拠となった。以後、2010年の第2次調査では櫂が発見された。日本列島では縄文時代に出土された丸木舟が120余隻、遺跡は70余カ所に上っている。したがって、本稿では飛鳳里貝塚の概要と丸木舟の出土状況を把握し、日本列島で発見された縄文時代の丸木舟と比較して韓半島丸木舟の研究を予察してみたいと思う。

2 飛鳳里貝塚の概要

1) 環境と海岸線の変化

清道川が流れる飛鳳村の周辺は長さ2km、幅1kmほどの小さな野原が広がっている(写真1)。この地域は水田になる前には湿地の状態であり、清道川の堤防が築造される以前には洪水によって頻繁に氾濫する地域であったと思われる。このような地理的な特性と遺構の確認面から見ると、飛

韓国飛鳳里貝塚で出土した丸木舟の様相（李 相 均）

鳳里貝塚形成当時の清道川と洛東江は海の影響を受けたものと見られる。

飛鳳里貝塚はもっとも近い馬山湾までの直線距離が 20 kmほどであり、洛東江河口までは 70 kmほど離れている。内陸の飛鳳里貝塚で出土した貝殻は多数が淡水域のシジミであるが、カキの殻も発見されている。海で棲息するカキが飛鳳里貝塚で発見されることは、海水面変動による海岸線の変化があったということを念頭に置かなければならない。

飛鳳里貝塚は地形、気候、植生、生物の分布など、環境考古学の側面でも研究が進んだ。調査地域では堆積層位の分析、貝殻層の特性、ドングリの貯蔵穴の地形的特性、珪藻分析、炭素年代測定などの結果をもとに海水面変動の曲線が復元された（図面 1, 黄相一 2008）。飛鳳里地域の海水面変動研究によると、6,800 年前には海拔 -0.2 ~ -0.5m ほどであったが、6,550 年前には -2m まで下降し、5,500 年前には 0.8m まで上昇し、5,230 年前にはまた 0.2m まで下降し、5,000 年前には 1.5m まで上昇した後、はじめて海水面が安定された。これを根拠として飛鳳湾一帯の変化をみると、約 6,800 年前には飛鳳里貝塚とその周辺は海であったと見られる。現在の洛東江下流地域はすべて海であり、飛鳳里は内湾の状態であったと思われる。

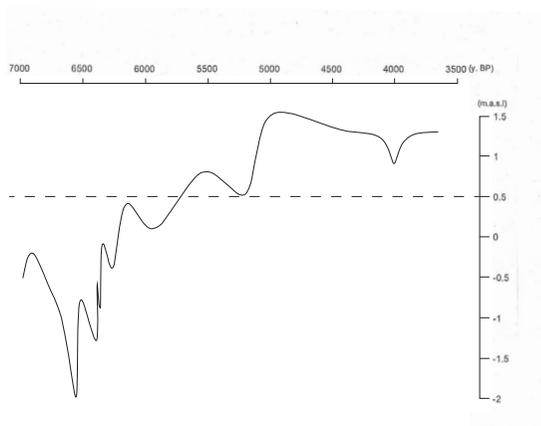
当時、飛鳳里村に住んでいた新石器人は、海辺で漁労とカキなど貝採集の生業を営み、丸木舟に乗って周辺地域との交流をおこなった。約 6,100 年前には以前に比べて水深が多少低くなったものの、相変わらず深い海域が維持された。飛鳳里貝塚で検出された珪藻を見ると、淡水や汽水域の珪藻よりも海で棲息する海水珪藻が 90% 以上検出されており、当時の飛鳳湾は海であったことが分かる。5,000 年前頃には飛鳳里海域の周辺が汽水域であったと研究されており、貝塚では汽水域に棲息するシジミが確認されている。新石器時代の終り頃の 3,500 年前には飛鳳湾の入口は相当狭くなり、水深も低くなった。ともに、飛鳳湾の塩分濃度は以前と比べて低くなった。また、飛鳳里貝塚の周辺には海が低くなるにつれ、三角洲が形成されるようになった。

このように、飛鳳里貝塚が形成された当時の海水面と自然環境は現在とは異なり、新石器時代においても時期によって海水面と周辺環境が変化していることが分かる。

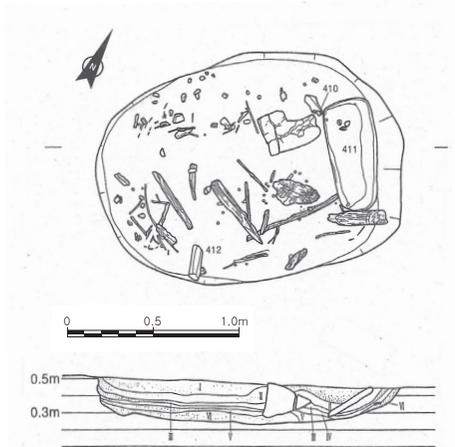
2) 遺構と遺物の概要

飛鳳里貝塚は揚排水場の工事過程で貝殻が検出されており、多くの土器片とともに有機物が確認された。この調査によって有機物を通した生業や生態系研究の契機となり、珪藻分析の結果、後氷期の早い時点で洛東江中・下流やその支流域まで海の影響が及ぼしたことが確認された。

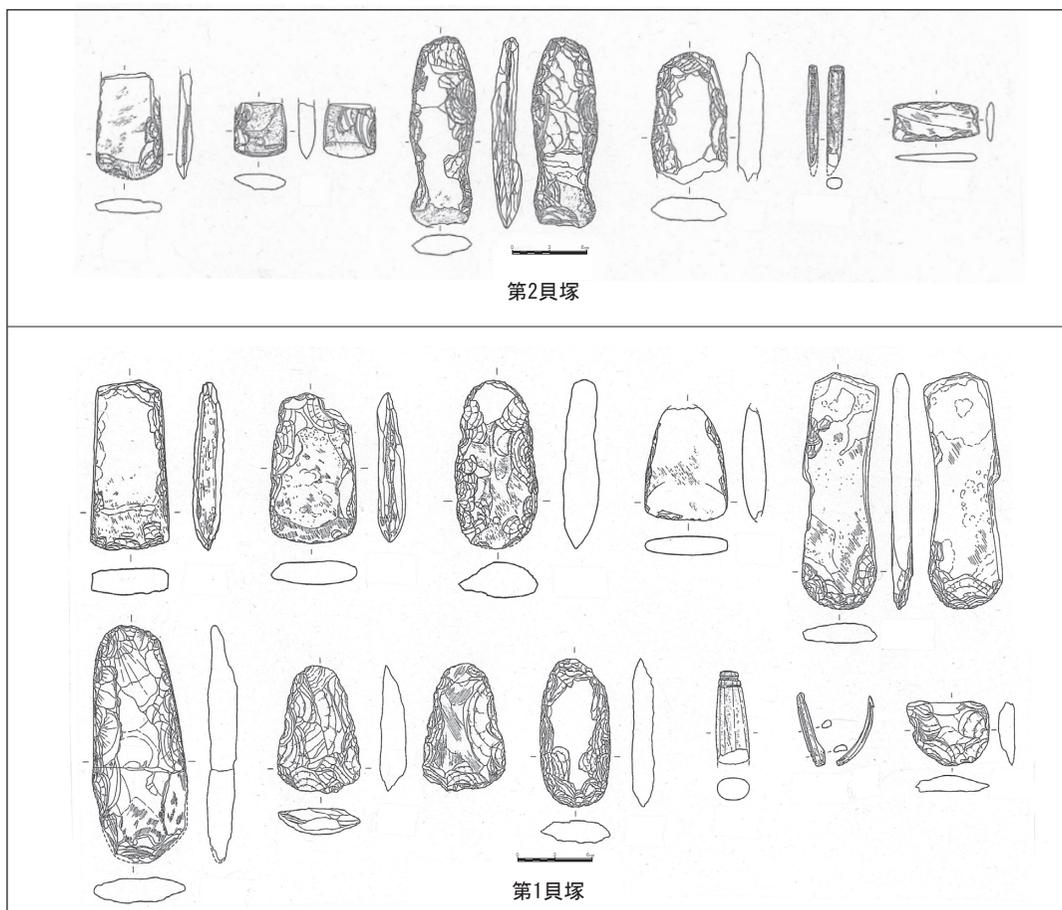
層位は 10 個の文化層が確認されており（表 1）、新石器時代の早期と前期の文化層の間に序列をはっきりと区分できる間層が確認された。V 層を挟んで早期後半の VI 文化層では隆起文土器、細沈線文土器、朱漆土器が確認されており、前期前半の IV 文化層では押引文土器、短線文土器、口唇刻目技法などが盛行している。これによって、層位の逆転現象で問題とされた他の貝塚遺跡の編年を再検討できるようになった。本稿の中心となる丸木舟が出土した層位を見ると、45 層の X 文化層で 1 号舟、第 1 貝層に属する IV 文化層で 2 号舟が出土された。



図面1. 飛鳳里のHolocene中期の海面変動曲線



図面2. 12号貯蔵穴平断面図



図面3. 飛鳳里貝塚出土石器

韓国飛鳳里貝塚で出土した丸木舟の様相 (李 相 均)

遺構は貯蔵穴 18 基、焼土遺構 7 基、野外炉跡 6 基、小形竪穴 2 基、住居址 2 基が調査された。層位から見ると、貯蔵穴は 19 層から 26 層の間に位置しており、時期的には新石器時代の前期に属するものである。その他の野外炉跡、焼土遺構は中期以後に属する。特に、ドングリの貯蔵穴は水の中に浸かっているものと陸の境にある貯蔵穴がある。構造はプラスク形が 4 基、U 字形が 11 基ほど確認された。この内、4 号・11 号・13 号貯蔵穴では木材が出土しており、9 号貯蔵穴では縄で編んだ籠、10 号・11 号貯蔵穴では破碎されたドングリの殻、12 号貯蔵穴では磨石と石棒が出土された (図面 2, 写真 2)。貯蔵穴の用度は渋味の除

表 1 飛鳳里貝塚の文化層と編年

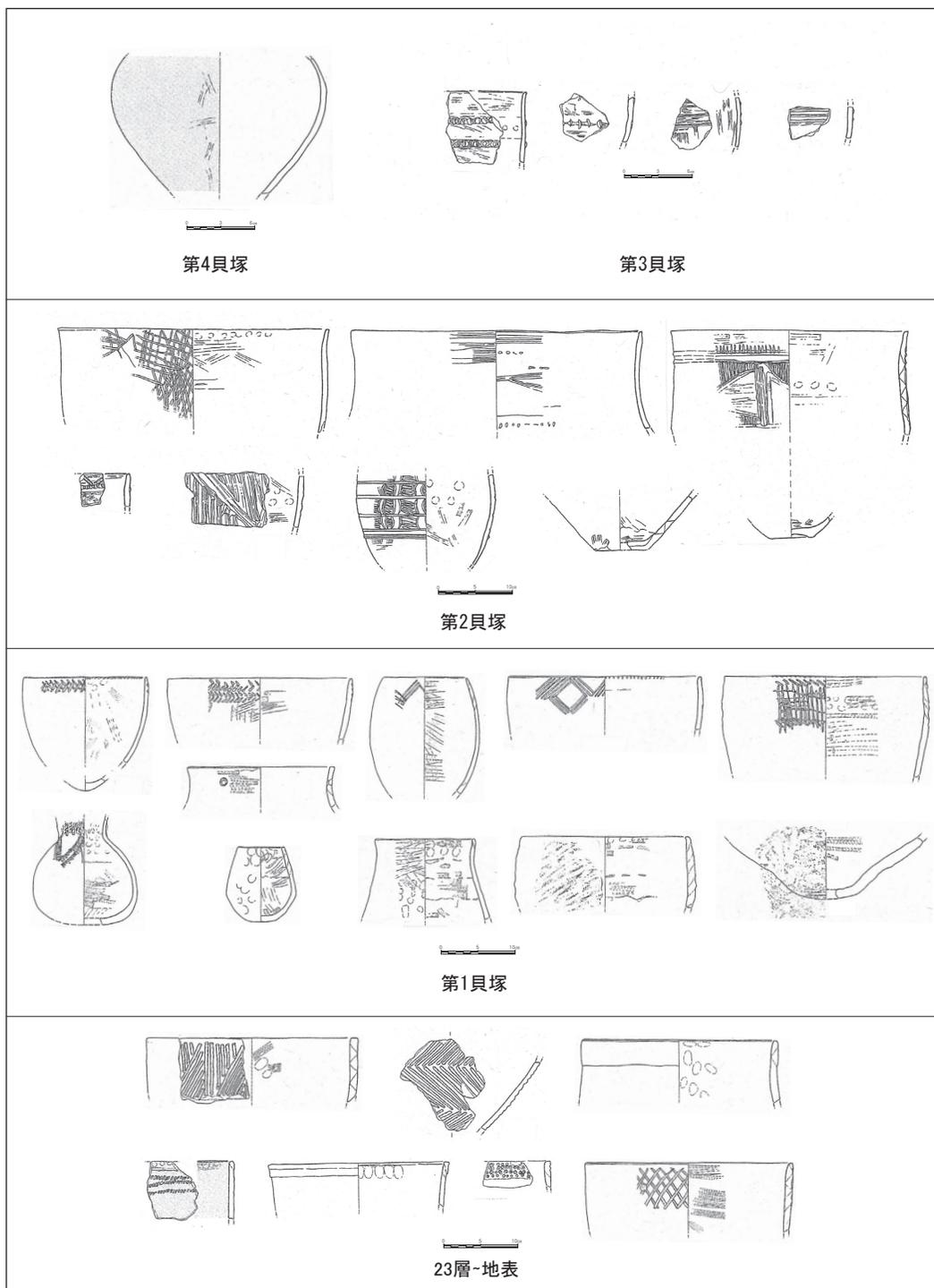
文化層	層位, 遺構	主要出土遺物, 特徴	時期区分
X	45層	-1号丸木舟	新石器時代 早期前半
IX	第5貝層		
VIII	第4貝層 第4敷石層	-朱漆土器 -鉢形, 壺形土器	
VII	第3貝層 第3敷石層	-隆起帯文, 隆起線文土器, 口唇刻目点列文土器 -口縁部のみ平行隆起文, 押形点列文施文 -砥石, 叩石, 漁網錘使用	
VI	第2貝層 第2敷石層	-隆起文土器の多様化, 施文部位の拡大 -細沈線文土器(格子文, 山形文, 爪形文) -朱漆土器, 広口長頸壺, 大型壺, 甕の製作 -磨製両刃石斧, 片刃石斧製作 -飛鳳里形スクレーパ, 磨石, 石棒使用	早期後半
V	26層 17号貯蔵穴	-ドングリ, 木材	前期前半
IV	第1貝層 第1敷石層 14号貯蔵穴 15号貯蔵穴 住居址	-2号丸木舟 -押引文土器(横走魚骨文, 山形文, 菱形文)盛行 -短線文土器盛行, 口唇刻目文の技法盛行 -中小型壺形, 大型鉢形土器製作 -打製片刃石斧など多様な石斧製作 -整形化された磨石, 石棒, 石刀使用 -大型結合式釣針, 石銛, 漁網錘使用	
III	23-19層貯蔵穴 1号炉跡	-貯蔵穴の有機物, 木材, 種子, 磨石, 石棒 -押引文, 短線文土器	
II	18層-17層 2-6号炉跡 6,7号焼土	-太線沈線文, 二重口縁土器 -陸成堆成層	中期以後
I	16層-14層 1-5号焼土 A-1貝塚	-太線沈線文, 二重口縁土器 -無文土器	青銅器時代

去施設、あるいは短期間の貯蔵空間と推定されているが、12 号貯蔵穴の磨石と石棒の出土から見て、加工空間の可能性もある。

石器においては砥石、台石、叩石、石斧、磨石、石棒、石刀、漁網錘、結合式釣針軸部、石槍などが出土された (図面 3)。丸木舟の加工具として使われた石斧は両刃石斧と片刃石斧と区分される。特に、異形、扇形片刃石斧は木材を整える際に使うものである。

土器の様相は新石器時代の早期から前期に至る変化様相を見せている (図面 4)。第 3 貝層と第 2 貝層の遺物差異、隆起文土器の器形と文様変化、細沈線文土器の登場につながる様相であり、第 1 貝層では隆起文土器の消滅以後、横走魚骨文、山形文、菱形文の押引文系土器が盛行する前期前半につながる。第 18 層以前は新石器時代中期以後の太線沈線文、二重口縁土器に変化する。

飛鳳里貝塚では韓半島の最古、最初資料である縄で編んだ籠、木器、糞石、動物文様の土器、丸木舟、櫂が確保された。籠は 9 号貯蔵穴の中から出土しており、三つの縄を結わえて編んだものである (写真 3)。材料はアシと推定されており、ドングリを貯蔵したり、水にさらす用途であろう。この籠



図面4. 飛鳳里貝塚出土土器

韓国飛鳳里貝塚で出土した丸木舟の様相（李 相 均）

は編物の技術を把握できる最初の資料であり、山内丸山遺跡で出土した籠と比較できるものである。木器は第1貝層と11号・12号貯蔵穴で出土したが、ドングリの貯蔵施設であると推定される。糞石は韓半島では初めてののものであり(写真4)、動物文様の土器はイノシシを描写したものである(写真5)。丸木舟は2005年に2隻、2010年に櫂1点が出土され、南海岸での移動、交流を裏づける資料が確保された。この丸木舟は日本のものより1,500年以上早いものとされる。

生計方式においては、採集、漁労、狩猟、牧畜の具体的な証拠が出土した。この他にも、自然遺物であるドングリ、マンシュウグルミの実、マツボックリ、貝類、シカ、イヌ、イノシシの骨などが出土され、多様な研究資料が確保された。飛鳳里貝塚の中心時期は新石器時代の早期から前期にかけての時期であり、放射性炭素年代は7,700~5,300BPを測る。

3 飛鳳里貝塚の丸木舟

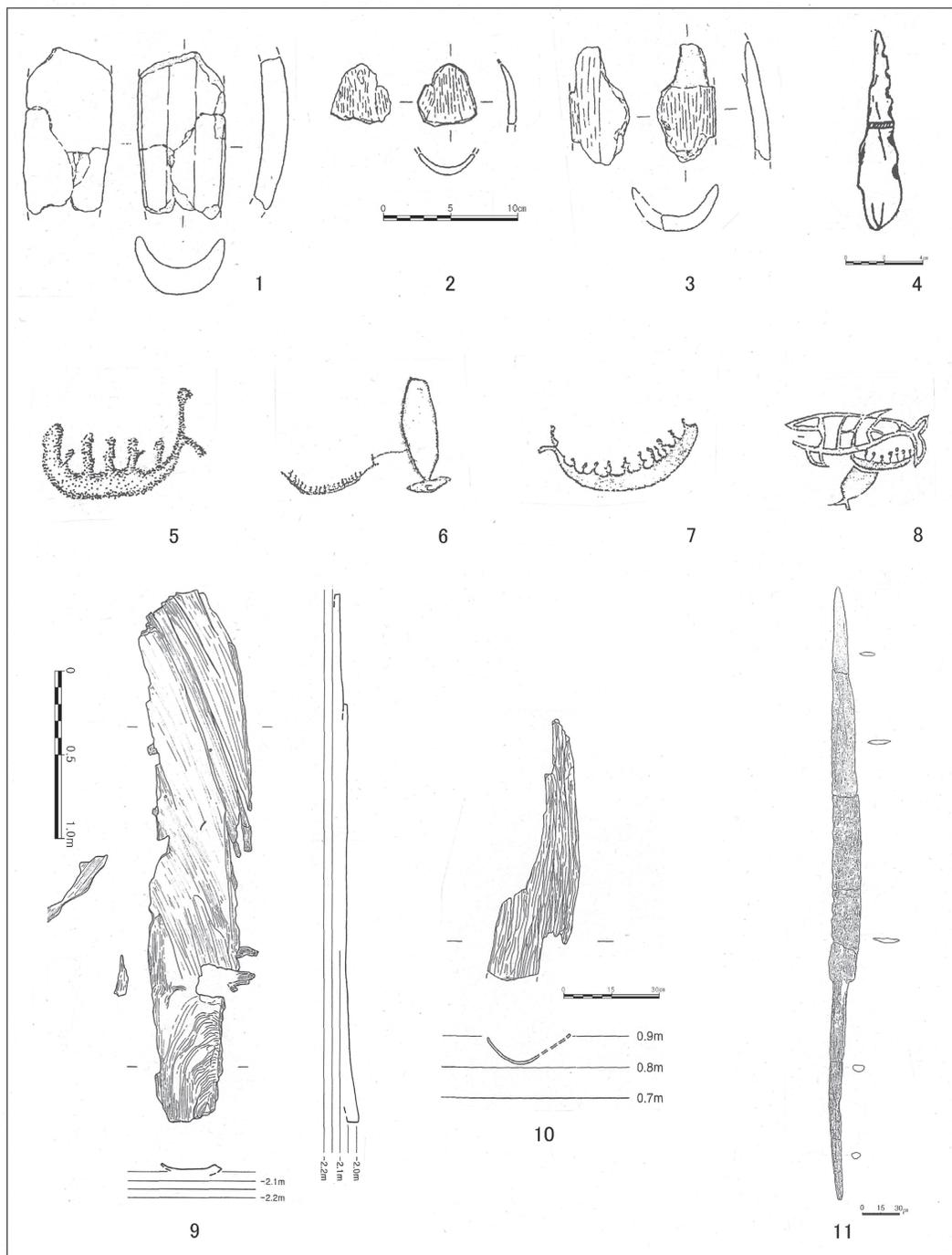
1) 韓国の丸木舟と関連した遺物

韓半島で先史時代に海上交易のため使われた運送手段は丸木舟である。新石器時代の舟と関連する遺物は釜山東三洞貝塚で出土した舟型土器と蔚州盤龜台の岩刻画に刻まれた4隻の舟である。先峰西浦項遺跡ではクジラの骨でつくった櫂が出土した。

東三洞貝塚では舟型土器片が3点出土した(図面5-1~3, 写真6)。1は船首、船尾が欠失しており、断面は半円形をなしている。残存長は12.3cm、幅6.3cm、高さ4.2cmほどである。2は舟型土器の船首あるいは船尾に属する。3は船首、船尾部分の断面半円形であり、残存長は8.9cm、幅4.5cm、高さ3.5cmほどである。これら3片の土器は製作技法や色調から見ると、同一個体のものである。この土器は新石器時代の丸木舟を表現してつくられたのであり、両舷が残っていて舟の構造を把握できるものである。残存状態から見れば、単材方式の丸木舟であり、断面形態は半円形である。このような構造は飛鳳里貝塚出土の丸木舟と類似したものである。

櫂は西浦項遺跡の第4期層で出土された。クジラの骨でつくられており、残存長は31cmほどである。端部に行くにつれ、広くなり、端部は鋭い(図面5-4)。櫂には通常木材を使用するが、骨で作った特異な例は日本にもない。

蔚州盤龜台岩刻画の1号舟は長さ10cm、乗船人員5名であり、舟は比較的平らで船首と船尾が立ち上がった形状である。2号舟は長さ18.5cm、乗船人員19名であり、クジラを引っ張っている形状である。3号舟は長さ19cm、乗船人員11名であり、舟は弓のように湾曲している。4号舟は長さ15cm、乗船人員7名であり、船首と船尾が緩慢である(図面5-5~8, 写真6)。盤龜台岩刻画の舟には乗船人員5名から多くは19名までであり、舟の規模が多様である。船首と船尾が立ち上がり、舟の底が弓のように曲がっているのが特徴である。1号舟と4号舟はそれぞれ5名、7名が乗船しており、10m以下の丸木舟を思わせる。今まで発見された縄文時代の丸木舟の中で、もっとも長いのは滋賀県水荈内湖遺跡で出土された8.3mのものである。8mほどであれば、乗船人員は5名前後となり、盤龜台の1号舟、4号舟と比較できるものである。しかし、盤龜台の2号舟は乗船



図面5. 韓国丸木舟関連遺物

1-3. 東三洞, 4.西浦項, 5.盤龜台1号, 6.盤龜台2号, 7.盤龜台3号

8.盤龜台4号, 9.飛鳳里1号, 10.飛鳳里2号, 11.飛鳳里の權

韓国飛鳳里貝塚で出土した丸木舟の様相（李 相 均）

人員が19名であり、新石器時代に使われた舟の規模に比べてはるかに大きい。19名の乗船人員から見ると、舟の規模は少なくとも20mを超えるものと思われる。新石器時代に既に大型のクジラ漁専用の舟が存在したと思われる。この丸木舟の製作には複材方式が用いられたものと推定される。

2) 飛鳳里貝塚の丸木舟と櫂

飛鳳里1号舟は飛鳳里貝塚の第5貝層下の新石器時代早期前半のX文化層で出土しており、現在の海面より2.1m低いところに位置する(表2, 図面5-9, 写真8)。1号舟は東西方向に置かれており、欠損してはいるが出土状態は良好である。両舷側、船首、船尾がなく、船底部のみ残っている状態である。残存長3.1m、厚さ2~5cm、最大幅62cmである。船首と船尾は確かではないが、狭くなる部分が船首部と思われる。船尾部は一部毀損されており、船体方向に重なっている。断面はU字形であり、船尾部の状態から見ると、4mを超える細長の丸木舟であると推定される。ところどころ加工した焦痕が発見されている。これは舟の加工の容易性と病虫害を防ぐ効果があったであろう。丸木舟の材質は樹齢200年以上のマツが用いられた。AMS年代測定の結果、約7,700年前のもの確認されており、縄文時代の丸木舟よりも時期的に1,500年ほど早いものである。

飛鳳里2号舟は新石器時代前期前半に属するIV文化層の第1貝層で発見されており、側面の一部のみ残っていて全体的な大きさは分からない(図面5-10, 写真9)。残存長64cm、厚さ1.2~1.7cm、残存幅22cmを測る。断面はU字形であり、内部と外部に石斧による加工痕跡がある。材料はマツである。同じ層の第1貝層の下層で出土した木材の年代測定から見れば、2号舟の年代はおよそ6,100年前の前後となる。

飛鳳里の櫂は2010年8月、第2次調査で発見された(図面5-11, 写真10)。櫂は第4ピットの2貝層で出土しており、1次調査の際に丸木舟が発掘された地点から東北方向におよそ9m離れたところで発見された。櫂は長さ1.78mであり、柄部65cm、身部1.13mほどで、完形の状態である。柄部と身部は幅がそれぞれ最大5cmと7.5cmであり、柄部と身部の両端が尖っている。柄先端部は尖頭状、肩部はなで肩、身先端部は三角形、身断面はレンズ状の長楕円形をなしている。時期は第2貝層で隆起文土器と細沈線文土器が主に出土されることから新石器時代早期後半の7,000年前の年代と推定される。

表2 飛鳳里貝塚出土の丸木舟と櫂

遺跡/号	時期	長さ, cm	幅, cm	厚さ, cm	木材	備考
飛鳳里/1	早期 前半	310	62	2~5	マツ	焦痕有り
飛鳳里/2	前期 前半	64	22	1.2~1.7	マツ	焦痕有り
櫂	早期 後半	178	5~7.5	1.1~2		両端尖る

4 縄文時代出土の丸木舟

1) 日本列島の地域別様相

日本列島で調査された縄文時代の丸木舟は120余隻が知られている。縄文時代の丸木舟出土地域は千葉県がもっとも多く、次に滋賀県の琵琶湖周辺や福井県から島根県に至る西部海岸地域にも出土量が多い。日本の各地域で出土した丸木舟の概要は次の通りである(李2009)。

(1) 北海道・東北地方

北海道地方では石狩町紅葉山49号遺跡で丸木舟の船首が出土した。丸木舟は長さ45cm、幅22cm、厚さ4cmほどである。この遺跡では長さ1.6m、幅7cm、厚さ2.7cmの櫂も出土した。時期は縄文中期に当たる。

東北地方青森県の野辺地町向田遺跡では縄文前期末から中期初に属する丸木舟の破片が出土した。福島県新地町双子遺跡ではマツの丸木舟2隻が出土した。時期は縄文後期である。

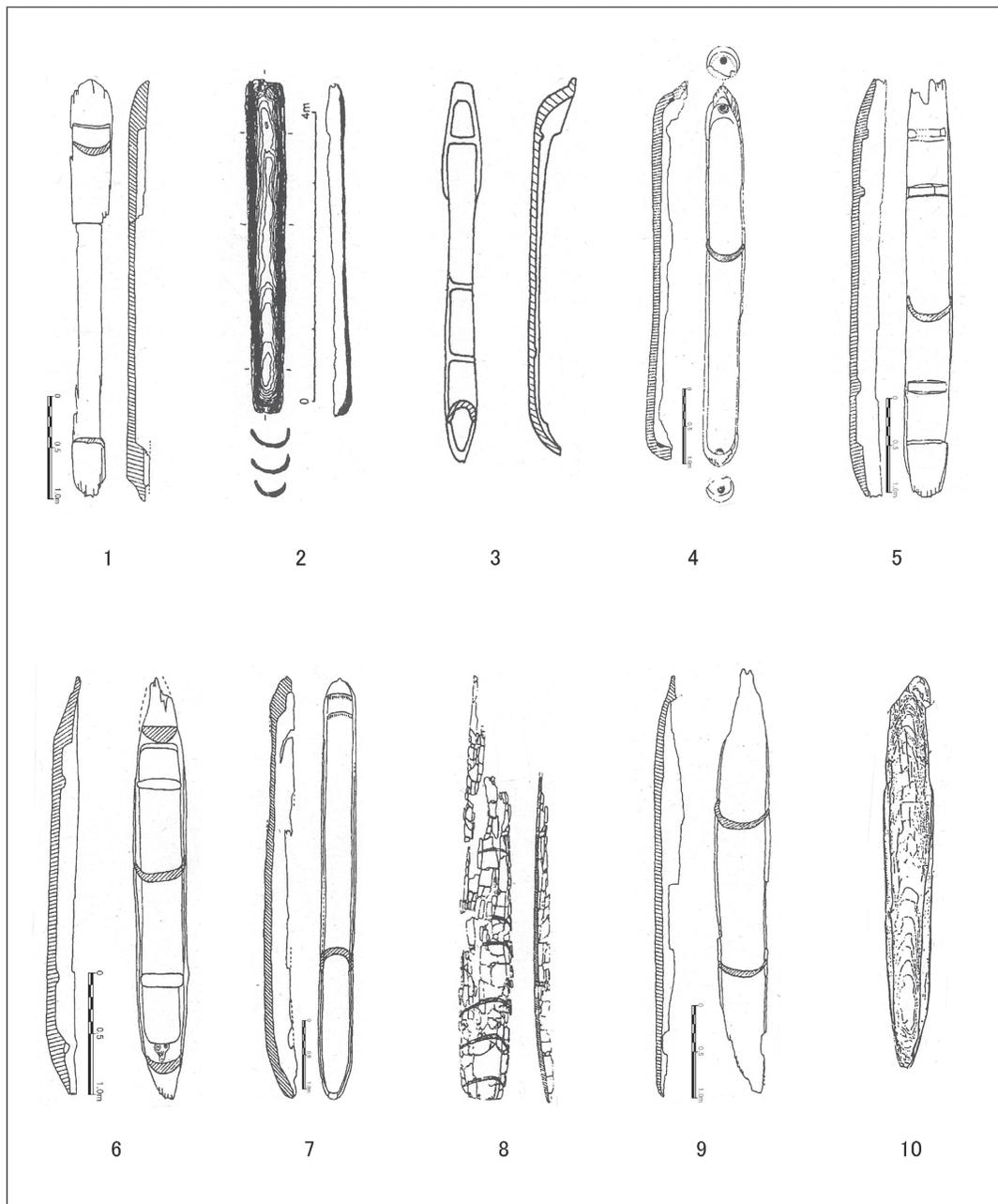
(2) 関東地方

茨城県龍ケ崎市牛久沼八間堰の下流である谷田川の砂層で縄文後期の丸木舟が発見された。舟の先端部と末端部が一部欠失しており、船底は平らである。材料はマツである。栃木県では西山田遺跡で長さ7m、幅75cm、深さ15cmの丸木舟が発見された。

埼玉県では16隻以上の丸木舟が発見された。もっとも多い膝子遺跡では6隻が発見されており、おもに縄文後期に属する。このうち、1号舟はほぼ完形のもので、長さ7mの大きさである(図面6-1)。形態は鯉節形、材料はクリである。伊奈屋敷跡の泥炭層では縄文後期から晩期のもつと見られる3隻の丸木舟が出土された(図面6-2)。このうち、状態のよい2号舟は長さ4.85mであり、形態は鯉節形である。草加市金明町綾瀬川流域では長さ6.1m、幅66cmの丸木舟が発見された。形態は鯉節形であり、船底の3ヶ所に横帯がある。材料はカヤである(図面6-3)。年代測定の結果、5,300年前の縄文前期のもつと判明された。この他にも、壽能、蓮沼、大道東、四本竹、赤山陳屋跡、老袋遺跡などで丸木舟が出土された。

千葉県で出土した丸木舟は40余隻以上知られており、日本ではもっとも多い出土量である。千葉県内ではおもに多古町と八日市場市で発見されている。多古町地域には中城下泥炭、栗山川流域、コブケ沼、南借当、船月丸山、島ノ間遺跡がある。これらの遺跡は砂丘の台地先端から下る地点にあり、丸木舟のほとんどは坂田池と栗山川水系で発見されている。この地域の丸木舟は4~5mほどの大きさであり、縄文後期のものが多い。多古町コブケ沼で出土した丸木舟は保存状態がよく、中央部の断面は三日月形、両端の断面は円形に近い(図面6-4)。八日市場市では矢摺泥炭、宮田下泥炭、宮田下、多古田低地、七間堀、旧新田下沼、大鏡、長割堀、安田、亀田泥炭遺跡があり、おもに低地帯の泥炭層や沼地で発見されている。丸木舟の大きさは4~5mほどの縄文後期のもつと

韓国飛鳳里貝塚で出土した丸木舟の様相 (李 相 均)



図面6. 縄文時代の丸木舟

1.勝子, 2.伊奈屋敷跡, 3.綾瀬川流域, 4.コブケ沼, 5.長割堀
6.大鏡3号, 7.検見川2号, 8.加茂, 9.高谷川B, 10.中里

あり、晩期のものもある(図面 6-5)。大鏡遺跡と旧新田下沼遺跡は総武本線と九十九里浜海岸線の間の低地にあり、以前は潟湖であったところである。用水路改良工事の一環で調査が行われ、多くの丸木舟が出土した。この地域の丸木舟には大鏡遺跡の3号舟のように船底部に横帯がある例もある(図面 6-6)。千葉市畑町検見川遺跡ではほぼ完形の丸木舟と櫂が発見されており、後の調査では2隻の丸木舟と6点の櫂が出土した(図面 6-7)。年代は $3,075 \pm 180BP$ で縄文後期に当たる。1948年丸山町の加茂遺跡では地下4mを超える泥炭層で丸木舟1隻と櫂が出土した(図面 6-8)。この丸木舟は日本初めてのものであり、縄文前期の諸磯式土器とともに出土した。材料はムクノキで、形態は鯉節形に断面は割竹形である。横芝町の高谷川B遺跡は低湿地であり、縄文後期の加曾利B式土器とともに丸木舟が出土された。丸木舟の形態は鯉節形で、断面は半円形をなしている(図面 6-9)。この他にも、千葉県内では高谷川G、古川、保品、横須賀遺跡などで丸木舟が出土された。

東京都では3ヶ所の遺跡で5隻の丸木舟が出土した。東北新幹線の建設工事に伴う中里遺跡ではほぼ完形の丸木舟が出土された(図面 6-10)。形態は鯉節形であり、舟の表面に焦痕が確認できる。時期は縄文中期初に当たる。東村山市下宅部遺跡の水場遺構では、長さ6.6mの縄文後期の丸木舟が発見された。この他にも、袋低地遺跡では3隻の丸木舟が破片で出土した。

神奈川県では横須賀市久里浜の伝福寺遺跡で縄文土器とともに地下4mの砂層で丸木舟が出土された。縄文前期から中期初のものであり、地形的に見ると、久里浜湾内で使われたものと推定される。

(3) 中部地方

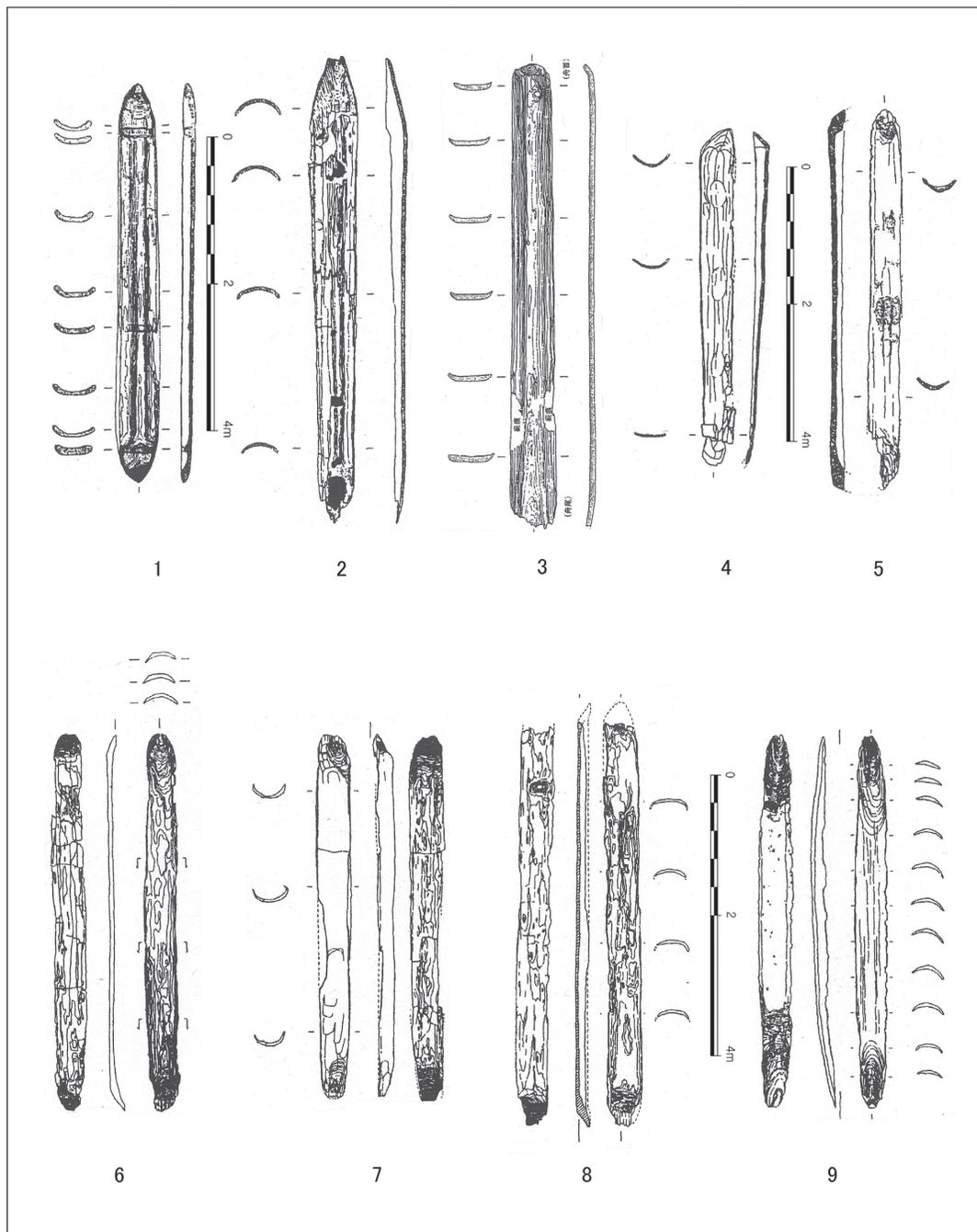
福井県以外の中部地方では新潟県の青田遺跡、静岡県の太谷川遺跡、愛知県の佐織村遺跡で縄文晩期の丸木舟が出土した。太谷川遺跡の丸木舟はほぼ完形のものであり、佐織村遺跡の丸木舟は複数の木材をつないで作った。岐阜県の末福遺跡ではほぼ完形の縄文後期の丸木舟2隻が出土した。

福井県の三方町内では鳥浜貝塚で2隻、ユリ遺跡で4隻の丸木舟が出土された。鳥浜貝塚は縄文時代の低湿地遺跡であり、丸木舟は三方湖南側の河川が合流する地点で発見された(図面 7-1)。1号舟は長さ6.1m、幅63cmであり、時期は6,300年前の縄文前期のものである。2号舟は長さ3.5m、幅48cmであり、船底に横帯の痕跡がある。時期は縄文後期である。ユリ遺跡は鳥浜貝塚の西側近隣にある低湿地遺跡である。1号舟は長さ5.2m、幅56cmであり、船底に3列の横帯が残っている。時期は縄文後期である。4号舟は長さ5.9m、幅57cmであり、船底は平らに削り出している。時期は縄文晩期であり、材料はスギである(図面 7-2,3)。

(4) 近畿地方

滋賀県で出土した丸木舟はほとんどが琵琶湖とその周辺であり、4ヶ所の遺跡で28隻ほど発見された。その中でも、松原内湖、入江内湖遺跡で16隻の丸木舟が発見された。松原内湖遺跡では11隻が調査されており、完形のは3隻に達する(図面 7-4,5)。この遺跡では縄文後期の土器とともに石鏃、石斧、石錘、石匙、装身具、櫛、木製品、櫂などが出土した。入江内湖遺跡では縄文

韓国飛鳳里貝塚で出土した丸木舟の様相 (李 相 均)



図面7. 縄文時代の丸木舟

- 1.鳥浜1号, 2.コリ1号, 3.コリ3号, 4.松原内湖1号, 5.松原内湖11号
 6.入江内湖1号, 7.入江内湖2号, 8.入江内湖4号, 9.入江内湖5号

中期末から後期初に属する4隻の丸木舟が出土された(図面7-6~9)。その後の調査でも、縄文前期前半の朱塗りの木製容器とともに丸木舟1隻が5号舟として追加で出土した。5号舟の平面形態はV字形に近く、断面は半円形をなしている。近江八幡市水荃内湖遺跡は琵琶湖東南部に位置しており、干拓工事によって発見された。周辺の丘陵では縄文後期の集落が調査されており、丸木舟はその下の湖岸地域で出土された。丸木舟は1次調査で2隻、2次調査では5隻が調査された(図面8-1,2)。2次調査では1号と2号が使用中のものと推定されており、5号舟は廃棄されたものである。形態は鯉節形であり、舟の中と周辺から縄文後期の彦崎K2式土器が見つかっている。湖北町尾上浜遺跡の砂層では完形の丸木舟が出土された(図面8-3)。石斧で加工した痕跡があり、周辺から出土した土器から見ると、縄文後期のものである。この他にも、近江八幡市長命寺湖底では縄文晩期後半の丸木舟4隻と櫂(図面8-4)、大津市錦織遺跡では縄文晩期の丸木舟が出土した。安土町竜ヶ崎A遺跡では櫂4点が出土した。

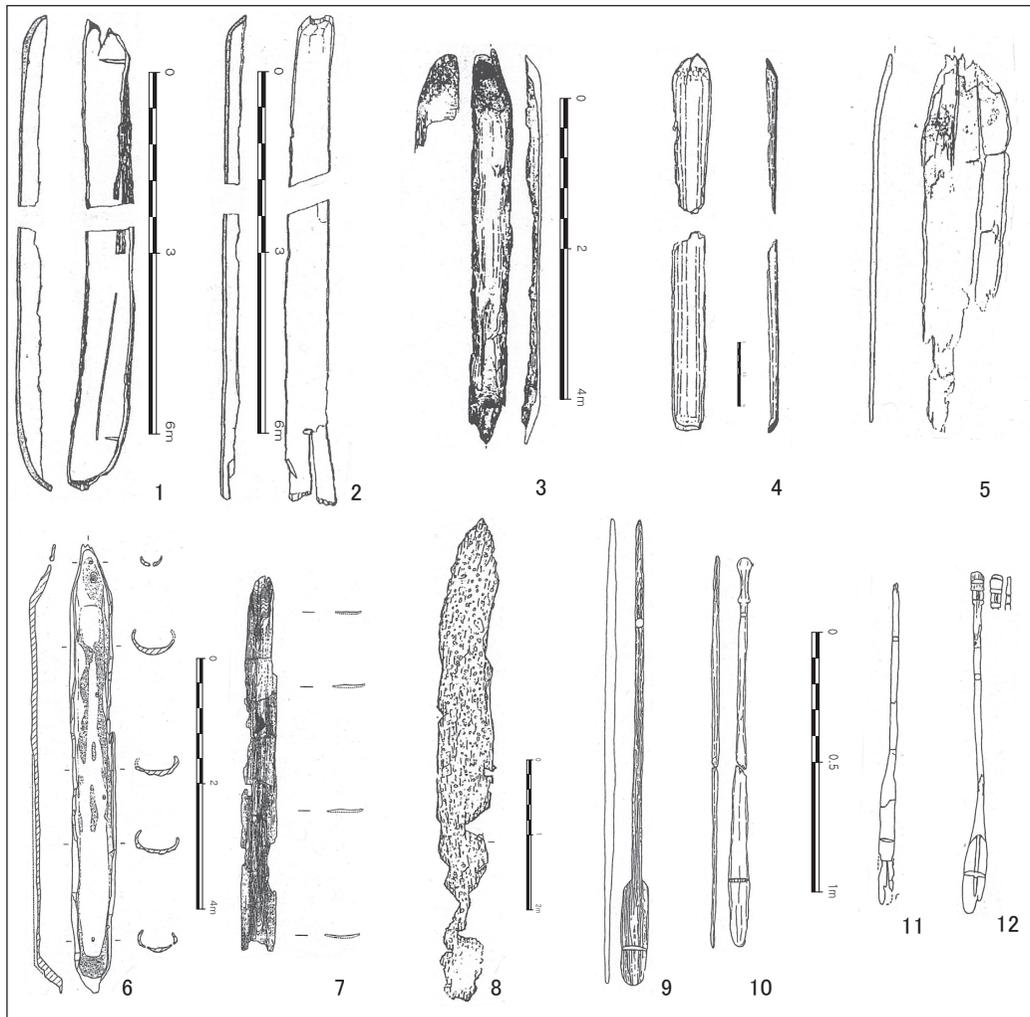
京都府で丸木舟が出土した遺跡は浦入遺跡、大波下遺跡、森本遺跡、東土川西遺跡、和束川床遺跡がある。兵庫県の佃遺跡では縄文前期の丸木舟が出土された。浦入遺跡は舞鶴湾の外海出入地点に位置しており、丸木舟は縄文前期の地層で出土された(図面8-5)。直径2mのスギを割って作ったものであり、焦痕と石斧で削り貫いた痕跡が残っている。縄文前期の外洋航海が可能となり、遺跡の周辺では棧橋の跡、いかりとして使われた大きな石が発見され、当時の船着場であったと推定される。舞鶴市大波下遺跡では縄文中期の丸木舟が出土された。

(5) 山陰地方

鳥取県では桂見遺跡、東桂見遺跡、栗谷遺跡、島遺跡、井出跨遺跡で丸木舟が出土した。桂見遺跡は鳥取市湖山池南東沿岸の低湿地にあり、2隻の丸木舟は縄文後期の北白川上層式土器の出土層で櫂とともに見つかった。1号舟はほぼ完形であり、形態は鯉節形である(図面8-6)。7.2mを超える大きさで、縄文時代の丸木舟としては最大級である。2号舟は先端が若干欠失しており、長さ6.4mほどの折衷形である。1号舟同様内面に焦痕があり、材料はスギである。

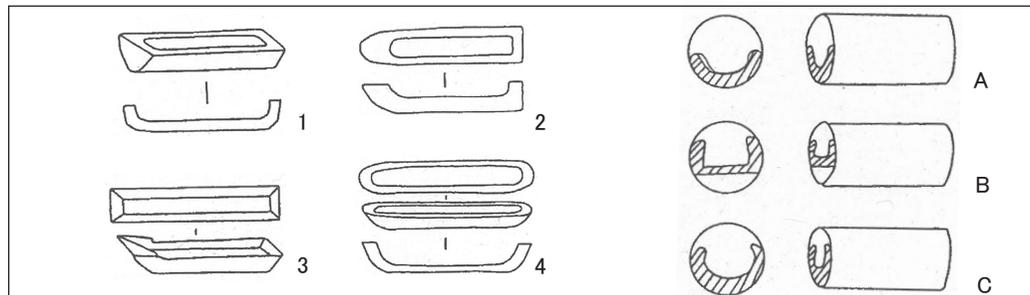
島根県内では島大構内遺跡、沖手遺跡、三田谷I遺跡、佐太講武貝塚で丸木舟が出土した。島根大学構内遺跡の1次調査で縄文前期の泥炭層から長さ6m、幅60cmほどの丸木舟と櫂2点が出土した(図面8-7)。丸木舟は厚さ2~3cmで非常に薄く、材料はスギである。三田谷I遺跡は出雲市の神戸川右岸にあり、縄文後期の底湿地遺跡である。出土した丸木舟は、長さ5.6m、幅60cmであり、形態は鯉節形と考えられる。内面のところどころに焦痕があり、材料はスギである。沖手遺跡では2隻が出土された。1号舟は完形のものであり、長さ5.3m、幅55cmほどである。先端は尖っており、後端は角形である。2号舟は残存長3.1m、幅36cmで、材料はセンダンである。時期は縄文後期から晩期初頭に属する。佐太講武貝塚では縄文晩期の丸木舟が出土しており、日本では稀なモミ属の木材が使われた。

韓国飛鳳里貝塚で出土した丸木舟の様相 (李 相 均)



図面8. 縄文時代の丸木舟と櫂

- 1.水荃内湖2次1号, 2.水荃内湖2次2号, 3.尾上浜, 4.長命寺湖底, 5.浦入
6.桂見, 7.島大構内, 8.伊木力, 9.島大構内, 10.鳥浜, 11.加茂, 12.大鏡



図面9. 縄文時代丸木舟の形態分類

- 1.割竹形, 2.鯉節形, 3.箱形, 4.折衷形, A. 半円形, B. 凹字形, C. 半円特殊形

(6) 九州地方

九州地方では長崎県の西彼杵郡多良見町にある伊木力遺跡で縄文前期中葉の丸木舟が出土された(図面 8-8)。海辺近くの湿地で発見された丸木舟は船底部のみ残っており、残存長 6.5m、最大幅 76cm、厚さ 2.5~5.5cm ほどである。フナクイムシによる腐植がひどく、破損して放置されたものと推定される。舟の北西側端部に焦痕が残っている。材料はセンダンである。縄文時代の丸木舟として九州では初めての発見であり、韓半島と九州において交流の物的証拠として提示されてきた。沖縄県の前原遺跡でもハリギリで作った丸木舟が出土された。

2) 縄文時代丸木舟の形態

日本の丸木舟は縄文早期末頃から作られており、前期にも 10 余ヶ所の遺跡で出土している。しかし、丸木舟が急増するのは縄文後期からである。縄文後期から物資の運搬としての役割が大きくなり、この時期から生活の基盤が低湿地に集中するなど、生業において変化があったと思われる。

丸木舟の出土状態は、水域の影響が及ぼす低湿地遺跡の限定された環境で断片的に出土することから保存状態が悪く、土圧によって変形する場合が多い。また、木質が脆く、取り扱いにくい。したがって、完形として出土するのは稀であり、丸木舟本来の規模は把握しにくい。出土した丸木舟のうち、もっとも大きいものは滋賀県水荃内湖遺跡の 8.3m ほどのものである。7m が超えるものは 7 隻、6m 以上のものが 10 隻ほど確認されている。丸木舟の平均長は 4.5~6m ほどであり、幅は 45~60cm のものが 70% を占めるものとされる(松田 2003)。しかし、大きさで時期別特徴の把握は難しく、地域別、木材選別の視点から考える必要がある。

丸木舟の形態は平面形と縦断面によって割竹形、鯉節形、箱形、折衷形の 4 種類に区分されており、横断面形態は半円形、凹字形、半円特殊形の 3 種類に区分している(図面 9, 清水 1975)。下記の表は清水の分類に従い、図面から確認される丸木舟の形態と断面を持ついくつかの例をあげたものである(表 3)。

表を見ると、北海道の紅葉山 49 号遺跡は割竹形の形態に半円形の断面をもつ 1A 類型に属する。千葉県大鏡遺跡の 3 号舟は鯉節形である。断面は中央部が角張った凹字形であり、両端にいくにつれ半円形をなしている(図面 6-6)。したがって、形態分類は 2A・B 類型とみなせる。福井県ユリ遺跡の縄文後期の 1 号舟は船底を平らにしようとする傾向が見られ(図面 7-2)、晩期の 4 号舟では完全に平らに成形していて(図面 7-3)、2A から 2B への変化が想定される。鳥取県桂見遺跡の 2 号舟と島根県沖手遺跡の 1 号舟は折衷形であり、4A 類型と分類される。このようにみると、丸木舟の変化は後期から晩期にいくにつれ、2A から 2B、2A から 4A への変化がうかがわれる。

日本の丸木舟は平面形態において、鯉節形が圧倒的に多い。いわゆる、2A 類型が縄文時代の丸木舟を代表していると言える。2A 類型は日本全域で均等に分布している。時期的にも縄文前期から晩期まで全時期にわたって使われているが、その中でも後期の丸木舟がもっとも多い。割竹形の丸木舟は縄文時代には使用頻度が低く、北海道の紅葉山 49 号遺跡が知られている。折衷形や箱形

韓国飛鳳里貝塚で出土した丸木舟の様相（李 相 均）

表 3 縄文時代の主要丸木舟の形態分類

所在地	遺跡/号	時期	形態	木材	備考
北海道 石狩町	紅葉山49号	中期	1A		櫂出土
埼玉県 埼玉市	膝子/1	後期~晩期	2A	クリ	
埼玉県 草加市	綾瀬川流域	前期	2A	クリ	横帯
千葉県 多古町	コーブケ沼	後期	2A		
千葉県 八日市場市	大鏡/3		2A,B		横帯
千葉県 畑町	検見川/2	後期	2A	カヤ	完形
千葉県 横芝町	高谷川B	後期中葉	2A	カヤ	
東京都 北区	中里	中期初	2A	ムクノキ	
福井県 三方町	鳥浜/1	前期	2A	スギ	完形, 横帯
福井県 三方町	ユリ/1	後期	2A	スギ	完形, 横帯
福井県 三方町	ユリ/2	後期	2A	スギ	
福井県 三方町	ユリ/4	晩期	2B	スギ	
滋賀県 米原市	入江内湖/1	中期~後期	2A	モミ	
滋賀県 米原市	入江内湖/2	中期	2A	モミ	完形
滋賀県 米原市	入江内湖/4	後期初	2A	モミ	完形
滋賀県 米原市	入江内湖/5	前期前半	2A	ヒノキ	
滋賀県 彦根市	松原内湖/11	後期~晩期	2A		完形
鳥取県 鳥取市	桂見/1	後期中葉	2A	スギ	完形
鳥取県 鳥取市	桂見/2	後期中葉	4A	スギ	
島根県 出雲市	三田谷 I	後期	2A	スギ	
島根県 益田市	沖手/1	後期~晩期初	4A	クスノキ科	

は遅い時期からであり、弥生時代以後に使われる傾向にある。

丸木舟の形態変遷は地域や自然環境によって若干の差が見られる。たとえば、福井県の若狭湾地域のように外海に面した縄文前期の鳥浜貝塚と浦入遺跡で出土した丸木舟の場合、断面形態が半円形をなしているが、後期と晩期にいくにつれ、船底が平らになって凹字形をなす。船底の厚さも後期までは4cmほどで薄いですが、晩期になると8cmほどで厚くなり、重量も重くなると言われる(網谷 2007)。したがって、この地域では丸木舟の断面が半円形から凹字形に、軽量形から重量形に変遷するものと見られる。しかし、琵琶湖とその周辺は縄文全時期にわたり、半円形が維持される。琵琶湖周辺で出土した丸木舟は内湖と河川を結ぶ用途であったと思われ、丸木舟の大きさも外海進出の舟より小さい。

また、丸木舟の外見上特徴と両端部の形状、さらに舷側の高低、両端部底の角度などから丸木舟の運送用度を区分する見解もある。丸木舟の船首、船尾の立ち上がり角度が急で、両端が丸い形態のものが内湖型、立ち上がり角度が緩やかで、両端が尖り気味ものが本湖型で区分することや舷側の高さが10cm前後の内水域航行用と20~30cmの高さの外洋航行用として区分する研究もある(横田 1992)。鳥取市湖山池南東沿岸の低湿地で出土した桂見遺跡の丸木舟から見ると、1号舟は地域間交流に用いる外洋航行用、2号舟は潟湖など内水域航行用として使われたものと推定できる(中原 1998)。

3) 縄文時代丸木舟の特徴

丸木舟は製作途中のもの、使用中のもの、廃棄されたものなど多様である。製作途中のものは栃木県西山田遺跡、東京都下宅部遺跡で出土し、廃棄されたものは滋賀県水茎内湖2次遺跡の5号舟がある。縄文時代の丸木舟はたいがい割竹形、鯉節形のように原木を割って削り貫く単純な構造の単材方式であるが、これには航海の安全性と乗船の利用空間に制約がある。したがって、単材の丸木舟前後をつないで、舟幅を広げた複材方式の丸木舟に発展していく。丸木舟のほとんどは単材方式であるが、後期、晩期になると、既存丸木舟の舷側に板材をつなぐ複材方式の丸木舟が作られる。複材方式の例は、岐阜県佐織村遺跡の丸木舟がある。

丸木舟には船底部の前後に中心線と直交する幅の狭い横帯の隆起が存在するものがある。横帯の痕跡は関東地方南部地域の埼玉県草加市綾瀬川流域、千葉県新田下沼、大鏡、長割堀遺跡と琵琶湖とその周辺の外海の福井県鳥浜貝塚、ユリ遺跡、滋賀県水茎内湖遺跡、滋賀県長命寺湖底遺跡などで出土している。時期は綾瀬川流域、鳥浜貝塚のように縄文前期の例があるが、おもに後期以後に多くなる。千葉県旧椿海周辺にある遺跡で出土した丸木舟のうち、横帯のあるものは小型のものが多く、おもに内湾・河川航行用と見る見解もある(山岸, 2004)。綾瀬川流域出土の丸木舟は横帯が3ヶ所で確認された鯉節形である(図面 6-3)。大鏡遺跡の3号舟は両端が尖っており、船底部前後に2ヶ所の横帯が残っている(図面 6-6)。舟の断面は中央部が角張った凹字形であり、両端部は半円形に近い。琵琶湖周辺の水茎内湖遺跡で出土した7隻の丸木舟は鯉節形であり、断面は半円形をなして

韓国飛鳳里貝塚で出土した丸木舟の様相（李 相 均）

いる。このうち、横帯は3隻で確認されており、横帯のある丸木舟は大概鯉節形をなしている。

丸木舟の加工には多様な技術があると思うが、加工の空間を火で燃やしながらかみで削り貫く方法が用いられる(小林 2008)。焦がすことによって、削りやすくなる。それに、原木の繊維が緻密になり、舟の耐久性が増していく。当然、丸木舟の内部に焦げた痕跡が残るが、千葉県の栗山川流域、東京都の中里遺跡、滋賀県の水荃内湖遺跡、京都府の浦入遺跡、長崎県の伊木力遺跡の丸木舟から焦痕が確認されている。特に、浦入遺跡の丸木舟はかみで削り貫いた痕跡がはっきりと見える。製作工程の最終仕上げは舟の外面を火で燻したものの、研磨するもの、油を塗るものがある。浦入遺跡のように、外海を運行した丸木舟には外面を燻した方法が使われる。

近年、丸木舟を製作して航海を試み、舟の製作時間、労動力、航海速度などを実験する研究も進められている(横田 1992)。丸木舟を復元製作して実験を行なったことによると、外洋の航海にも耐られる構造であったと思われる。最初は沿岸に沿って運行したが、しだいに外海に出て海流に乗って航海を行ったであろう。

丸木舟の航海において、櫂は欠かせない道具である。最初は乗船した人がパドル状の櫂を使用したが、古代では舟の両側に櫂座や櫂の装置を設け使うようになった。櫂は北海道の紅葉山49号遺跡、神奈川県翼根尾遺跡、千葉県の見川遺跡、加茂遺跡、大境遺跡、見川遺跡、新潟県の青田遺跡、静岡県の角江遺跡、町田遺跡、石川県の三引遺跡、福井県の鳥浜貝塚、滋賀県の入江内湖遺跡、長命寺湖底、竜ヶ崎A遺跡、島根県の島大構内遺跡など35ヶ所の遺跡でおよそ70点が発見された(図面 8-9~12)。特に、見川遺跡では6点の櫂が出土した。この中で、縄文前期の櫂は島大構内、鳥浜貝塚、翼根尾、加茂、大境遺跡で確認されており、大型長身で細形のものが多い。縄文時代の丸木舟には櫂を両舷側に固定させたり、帆を設けた痕跡がないので、両手で持って自由に漕ぐパドルのような櫂を用いたと思われる。

丸木舟の材料はスギ、クリ、マツ、カヤ、センダン、クズ、アカガシ、モミ、ムクノキ、ケヤキ、トチノキ、ヒノキ、トネリコ、ニレ、カシなど多様な樹種である。このうち、もっとも多く用いられるのはスギとカヤである。地域別に見ると、関東地方ではカヤ、クリが多く、特に、千葉県ではカヤが主流をなす。時期的には加茂遺跡、中里遺跡の縄文前期と中期にはムクノキが用いられるが、後期になるとカヤとクリ材料が多くなる。福井県の鳥浜貝塚とユリ遺跡ではスギが使われており、琵琶湖周辺ではスギとモミが使われた。山陰地方ではスギ使用の遺跡が多い。日本海側や琵琶湖周辺の遺跡は縄文全時期にかけてほとんどスギが用いられる。他に、マツ、センダン、アカガシ、トチノキ、ヒノキ、ニレなどは丸木舟の材料として使われる頻度が低い。韓半島飛鳳里貝塚の丸木舟はマツを使用しているが、縄文遺跡では福島県の子子遺跡や島根県の佐太講武遺跡のみ用いられ、日本でのマツの使用頻度は低いといえる。

これから丸木舟の研究には当時の社会的、精神的側面からアプローチが必要である。いわば、丸木舟が個人の所有なのか、それとも村単位の所有なのか、または丸木舟をつくった工人集団があったのかなどの問題も研究しなければならない。日本でも、これに対する具体的な研究はなさそうだ

が、民族学的な観点からの比較研究も可能であろう。

5 韓半島丸木舟研究の予察

韓半島では初めて、2005年に丸木舟2隻が、2010年に樺1点が飛鳳里貝塚で発見された。1号舟は新石器時代早期前半のX文化層、2号舟は前期前半のVI文化層、樺は2次調査の第4ピットの2貝層で出土された。飛鳳里貝塚の丸木舟は、当時内陸深くまで形成された海岸線の様相から見れば、外海よりも内湾の環境で使われたものと推定される。

飛鳳里貝塚出土の丸木舟は縄文時代の丸木舟より時期的に早い。今まで日本で縄文早期と前期の丸木舟が出土した遺跡は、青森県の向田遺跡、埼玉県の綾瀬川流域、千葉県の加茂遺跡、神奈川県伝福寺遺跡、福井県の鳥浜貝塚、京都府の浦入遺跡、島根県の島根大学構内遺跡、滋賀県の入江内湖遺跡、兵庫県の佃遺跡、長崎県の伊木力遺跡などがあげられる。飛鳳里の1号舟はAMS年代測定で7,700年前のものと確認されており、これら縄文時代の丸木舟よりも1,500年ほど先立つものである。飛鳳里の1号舟は、8,000BPを測る中国の跨湖橋遺跡出土の丸木舟とともに世界最古段階の丸木舟である。

飛鳳里貝塚出土の丸木舟は断言できないが、鯉節形である可能性が高い。断面が半円形をなしており、推定長さが4m以上であると考えられ、日本列島丸木舟の形態分類の2A類型に類似する。2A類型は縄文時代の丸木舟を代表し、時期も前期から見られる。このような遺跡は埼玉県の綾瀬川流域、福井県の鳥浜貝塚1号舟、滋賀県の入江内湖遺跡5号舟の例があり、飛鳳里貝塚の丸木舟も同じ類型であったと推定される。

縄文時代の丸木舟には船底部に横帯が存在するケースが多い。韓半島でもこれから横帯の痕跡のある丸木舟が発見される可能性が高い。飛鳳里貝塚の丸木舟は縄文時代の丸木舟のように原木を割り貫いた単純な構造の単材方式で作られる。丸木舟の加工は火で燃やしながら石斧で割り貫く方法であり、扇状の片刃石斧が使われた。丸木舟にはところどころ焦痕が残っており、2号舟は船底部と外部に幅2cm以上の石斧加工痕跡が確認された。縄文時代の京都府の浦入遺跡や長崎県の伊木力遺跡の丸木舟でも焦痕がある。

飛鳳里貝塚の丸木舟は樹齢200年ほどのマツを使っている。縄文時代の丸木舟は15種の樹木が使われており、その中でスギとカヤが主をなしている。日本でマツの使用は福島県の子子遺跡、茨城県の谷田川遺跡、島根県の佐太講武遺跡に限られており、マツの使用頻度は非常に低い。

韓半島と九州において交流の物的証拠として提示されてきた長崎県伊木力遺跡の丸木舟は残存長が6.5mほどであり、飛鳳里の丸木舟より大きい。また、丸木舟の北西側端部に焦痕が残っていて、丸木舟の製作、加工において飛鳳里と同様であったと推定される。丸木舟の材料はセンダンであるが、日本でセンダンが使用された例は2ヶ所しかない。

飛鳳里貝塚出土の樺は両端が尖りぎみであり、吉田の分類に当てはめれば、柄先端部は尖頭状、肩部はなで肩、見先端部は三角形、身断面はレンズ状の長楕円形をなしている(吉田2005)。この

韓国飛鳳里貝塚で出土した丸木舟の様相（李 相 均）

様子は通常、日本の櫂とは差が見られる。特に、柄と身の先端部が尖っているため、櫂として使いながら、ヤリの用途を兼ねた可能性もある。

以上のように、韓半島で実物の丸木舟が発見されたのは飛鳳里貝塚が初めてである。これからも、新石器時代の早期、前期の時期に海進の影響を受けた内陸では丸木舟の出土が予想される。日本でも丸木舟が発見されるのは縄文海進の影響下にある地域や湖岸地域であるからである。韓半島でも海進の影響にある低湿地に対して十分な調査と管理が必要であろう。

6 おわりに

本稿では飛鳳里貝塚で出土した丸木舟と櫂の出土現況を把握し、縄文時代の丸木舟と比較して韓半島丸木舟の研究を予察した。韓半島で新石器時代の丸木舟と関連した遺物は東三洞貝塚出土の舟型土器、蔚州盤亀台岩刻画の4隻の舟、西浦項遺跡のクジラ骨の櫂1点、飛鳳里貝塚の丸木舟2隻、櫂1点がある。飛鳳里貝塚の丸木舟1号は新石器時代の早期前半、2号舟は前期前半の時期であり、日本で出土した丸木舟より早い段階のものである。飛鳳里貝塚丸木舟の形態は鯉節形である可能性が高く、縄文時代の丸木舟形態分類の2A類型に類似する。飛鳳里貝塚の丸木舟は日本と同じように、原木を削り貫いてつくる単材方式である。加工においては、丸木舟のところどころに焦痕と石斧による加工痕跡が見られている。飛鳳里貝塚丸木舟の材料はマツであり、日本ではマツの使用頻度が非常に低い。

縄文時代の丸木舟は120余隻に達しており、縄文早期末から製作をはじめ、後期にいたって集中的につくられる。平面形態においては割竹形、鯉節形、折衷形が使われており、その中でも鯉節形がもっとも多く、断面は半円形をなす。これは、縄文時代丸木舟を代表する2A類型に属する。時期的にも前期から晩期まで全時期にかけて使われている。縄文時代の丸木舟は原木を縦割りにして削り貫く単純な構造の単材方式であり、後期、晩期には丸木舟の舷側に板材をつける複材方式の丸木舟が製作される。丸木舟には船底部に幅の狭い横帯が存在する場合がある。縄文時代丸木舟の材料は15種にわたるが、もっとも多いのはスギとカヤである。

丸木舟は保存処理されたもの以外の資料は実見できず、研究において多くの制約が付きまとう。今まで日本列島で発見された丸木舟の研究状況を根拠とし、今後韓半島で出土する丸木舟の基礎データを充実させなければならない。本稿がその基礎的資料に少しでも役立てればよいと思う。

註

1) 割竹形は大木を半裁し、前後の端と底部を刳だしたもの、鯉節形は割竹形の先端部を削り出して尖るように細くしたもの、箱形は大木を削りだして長方形の箱のようにしたもの、折衷形は割竹形と鯉節形を折衷したものである。

2) 横帯の役割に対しては船体の強度を維持したり、積み荷を安定させたりするが、漕ぎ手の踏ん張り部や船底部に浸水した水を汲み出すためのものとする見解もある。

3) 滋賀県の尾上浜遺跡で出土した完形の丸木舟をモデルとし、製作実験をおこなった。復元した丸木舟は長さ5.6m、幅55cm、高さ35cm、重さ170kgである。丸木舟の完成には1~2ヶ月の期間、3~4名の人員が必要であると推定した。復元した丸木舟の実験航海で5kmの所要時間は1時間40分、積載量は100kg程度運搬できるものと把握した。

4) 民族的にみると、ニュージーランドでは丸木舟の伝統的な技術、知識、儀禮を熟知した集団によってつくられており、丸木舟は首長や共同体の財産として継承されたりする。また、ソロモン諸島では丸木舟を保管する建物が儀禮の場所となることもある。

引用・参考文献

- KBS 歴史스페셜, 2005, 「新石器人들 바다를 건너다」
- 国立金海博物館, 2008, 『飛鳳里』
- 国立金海博物館, 2012, 『飛鳳里II』
- 国立中央博物館, 2005 『東三洞I』
- 金元龍, 1980, 「蔚州盤龜台 岩刻画에 대하여」, 『韓國考古學報』, 9号
- 徐国泰, 1986, 『朝鮮의 新石器時代』, 社会科学出版社
- 安在徹, 2004, 「우리나라 古代船舶」, 『古代文物交流와 京畿道』, 32回韓國上古史學會要旨
- 李相均, 2005, 『韓半島 新石器文化의 新東向』, 学研文化社
- 李相均, 2009, 「新石器時代 日本列島の 통나무배로 본 韓半島 통나무배 研究의 予察」, 『韓國新石器研究』, 18号
- 李相均, 2010, 『韓半島의 新石器文化』, 全州大学校出版部
- 李元植, 2003, 『韓國의 배』, 大院社
- 黄相一, 2008, 「飛鳳里 新石器遺跡址 地形 및 珪藻分析」, 『飛鳳里』, 国立金海博物館
- 京都府調査報告書29冊, 2002, 『浦入遺跡群』
- 国立科学館, 2001, 『日本人はるかな旅展』
- 吉田知史, 2005, 「日本原始・古代の櫂の研究」, 『史学』, 39号
- 大津市歴史博物館, 1993, 『琵琶湖の船』
- 島根大学文化財調査研究報告2冊, 1998, 『島根大学構内遺蹟3次調査』
- 同志社大学考古学研究室, 1990, 『伊木力遺跡』
- 網谷克彦, 2007, 「縄文時代丸木舟研究のために」, 『丸木舟の時代』, 滋賀県文化財保護協会
- 米原町教育委員會, 2004, 「入江内湖遺跡」, 『滋賀埋文ニュース』, 291号
- 福井県教育委員會, 1987, 『鳥浜貝塚-1980~1985年度調査のまとめ』
- 琵琶湖開発事業文化財調査報告書7集, 2003, 『尾上浜遺跡』
- 山岸良二, 2004, 「九十九里浜旧椿海周辺の縄文丸木舟」, 『時空をこえた對話』, 慶應義塾大学民族学考古学専攻設立25周年記念論集

韓国飛鳳里貝塚で出土した丸木舟の様相（李 相 均）

三方町文化財調査報告書 14 集, 1996, 『ユリ遺跡』

森川昌和, 2002, 『鳥浜貝塚』, 未来社

小林加奈, 2008, 「縄文時代丸木舟の復元製作実験」, 『考古学ジャーナル』, 574 号

松田真一, 2003, 「物流をうながした縄文時代の丸木舟」, 『初期古墳と大和の考古学』, 学生社

水野正好, 2007, 「湖国最初の丸木舟発掘」, 『丸木舟の時代』, 滋賀県文化財保護協会

市原市教育委員会, 1999, 「古代船がたどった海の道」, 『市民グラフいちほら』, 97 号

辻尾榮市, 1989, 「刳舟に関する形式形態の諸問題」, 『郵政考古紀要』, 23 号

辻尾榮市, 2000, 「日本刳舟関係資料集成」, 『郵政考古紀要』, 28 号

滋賀県立安土城考古博物館, 2006, 『丸木舟の時代』, 32 回企画展

鳥取市教育委員会, 1978, 『桂見遺跡』

中原齊, 1998, 「山陰の丸木舟」, 『考古学ジャーナル』, 435 号

中川正人, 2007, 「よみがえる縄文時代の丸木舟」, 『丸木舟の時代』, 滋賀県文化財保護協会

川崎晃稔, 1991, 『日本丸木舟の研究』, 法政大学出版局

清水潤三, 1975, 「日本古代の船」, 『船』, 社会思想社

出口晶子, 2001, 『丸木舟』, 法政大学出版局

横田洋三, 1992, 「縄文時代の丸木舟」, 『考古学ジャーナル』, 343 号



写真1 飛鳳里貝塚の全景

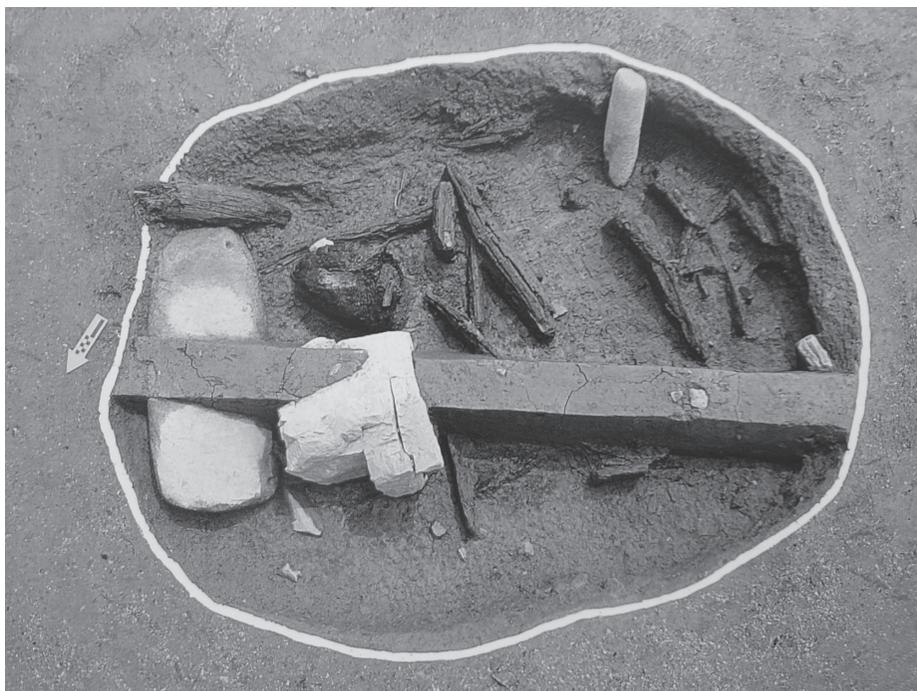


写真2 12号貯蔵穴

韓国飛鳳里貝塚で出土した丸木舟の様相（李 相 均）



写真3 縄で編んだ籠

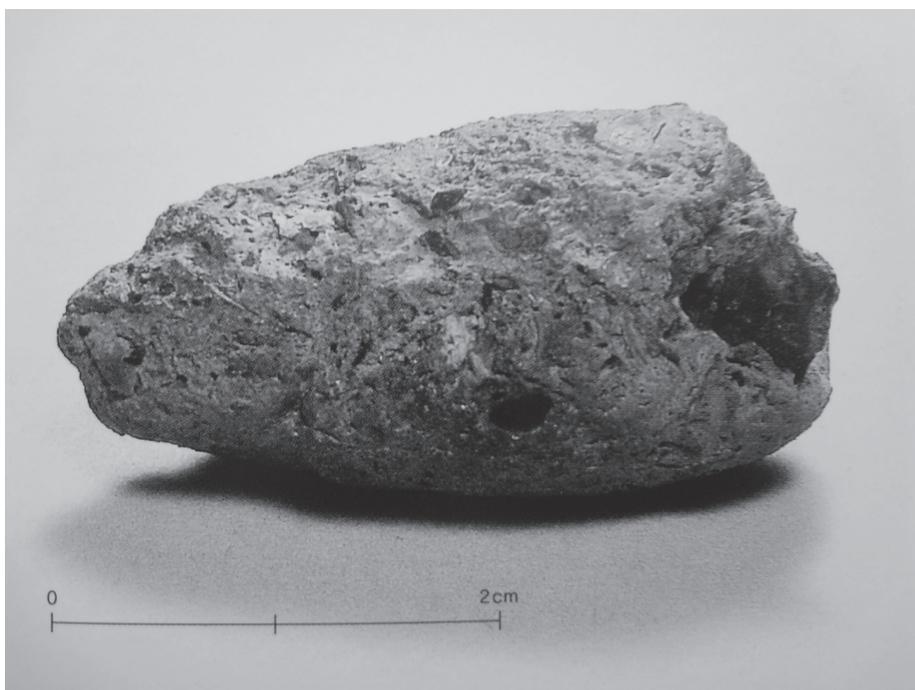


写真4 糞石

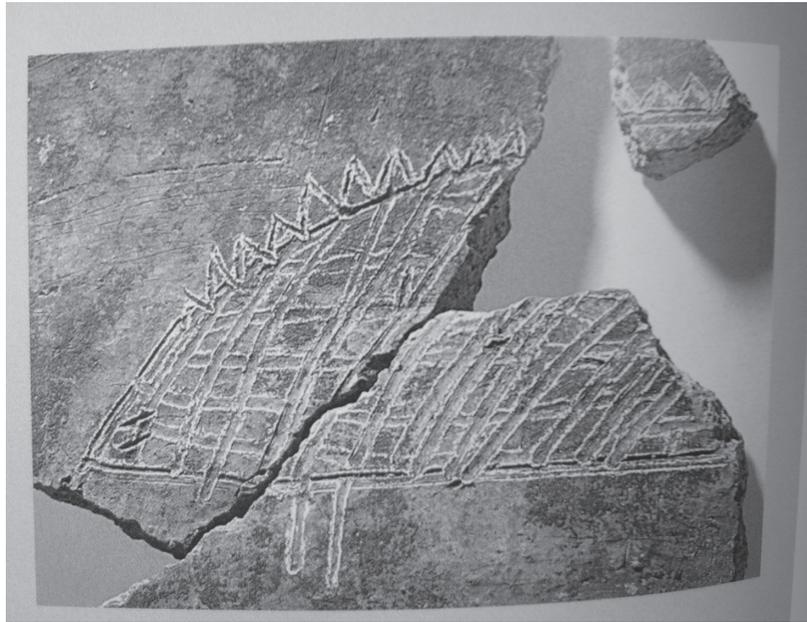


写真5 動物文様土器

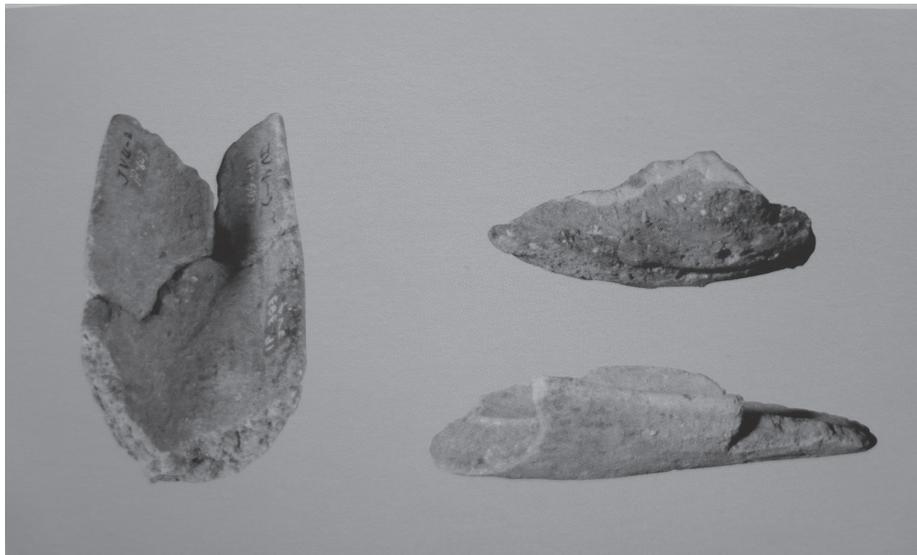


写真6 東三洞貝塚の舟形土器

韓国飛鳳里貝塚で出土した丸木舟の様相（李 相 均）

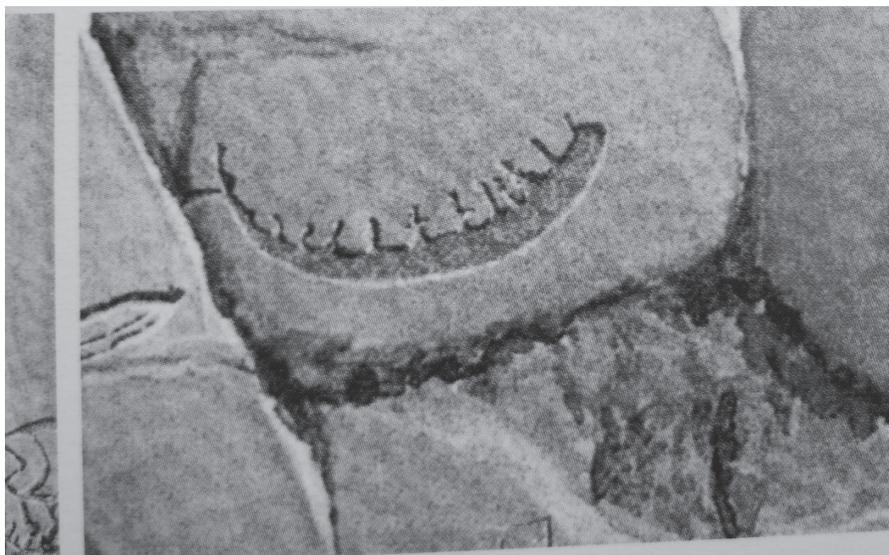


写真7 盤亀台岩刻画の3号舟



写真8 飛鳳里貝塚の2号舟



写真9 飛鳳里貝塚の1号舟



写真10 飛鳳里貝塚の櫂

한국 비봉리 패총에서 출토된 통나무배의 양상

이상균

본고에서는 비봉리패총 통나무배의 출토현황을 살펴보고, 일본열도에서 발견된 縄文時代 통나무배와 견주어 한반도 통나무배의 연구를 예찰해 보았다.

한반도에서 신석기시대의 배와 관련된 유구와 유물은 동삼동패총 출토의 배모양토기, 울주 반구대 암각화의 4기의 배 그림, 서포항유적의 고래뼈로 만든 노, 비봉리패총의 통나무배 2기가 있다. 비봉리 1호 통나무배는 신석기시대 早期前半, 2호 통나무배가 前期前半의 시기를 나타내고 있어, 日本에서 출토된 통나무배의 시기보다 빠르다고 할 수 있다. 비봉리 출토 통나무배는 鯉節形일 가능성이 높으며, 日本列島 통나무배 형태분류의 2A 유형과 유사하다. 비봉리의 통나무배는 일본지역과 마찬가지로 원목을 파내어 만드는 単材方式을 이용하고 있다. 가공에 있어서는, 통나무배의 군데군데 불에 그을린 흔적과 石斧로 인한 가공흔적이 보이고 있는 것으로 보아, 불로 태우면서 石斧로 찍어내는 방법이 사용된 것으로 추정된다. 비봉리 통나무배의 재료는 소나무를 사용하고 있으며, 삼목과 비자나무가 많이 사용되는 日本에서는 소나무의 사용빈도가 극히 낮다.

縄文時代の 통나무배는 120여기에 달하며, 早期 말부터 제작되기 시작하여 본격적으로 보급되기 시작한 것은 中期부터이고, 後期, 晩期에 이르러 집중적으로 나타나고 있다. 평면 형태에 있어서는 割竹形, 鯉節形, 折衷形이 사용되고 있으며, 그 중에서도 鯉節形이 가장 많고, 단면은 半円形이 주류를 이룬다. 이른바 縄文時代 통나무배를 대표하는 2A 유형에 속한다. 시기적으로도 前期부터 晩期까지 전 시기에 걸쳐 사용되고 있다. 縄文時代の 통나무배는 제작 도중의 미완성된 통나무배, 사용 중인 통나무배, 폐기된 통나무배 등 다양한 양상을 보이고 있다. 대개 통나무를 갈라서 파내는 단순한 구조의 単材方式이지만, 시기가 지나 後期, 晩期에는 통나무배의 舷側에 板材를 붙이는 複材方式의 통나무배가 제작되기도 한다. 통나무배 제작은 가공할 공간을 불로 태우면서 石斧를 이용하여 파내는 방법이 있으며, 舟底部에 폭이 좁은 橫帶가 존재하는 경우가 있다. 縄文時代 통나무배의 재료는 15종의 수종이 있어 다양하지만, 가장 많이 사용되는 수종은 삼목과 비자나무이다.

지금까지 日本列島에서 발견된 통나무배의 연구상황을 근거로 하여, 앞으로 한반도에서 출토되는 통나무배의 기초 데이터를 충실히 만들어야 할 것으로 판단되며, 본고가 그 기초적 자료에 조금이나마 보탬이 되기를 기원해 본다.